資本論入門

下

宮本　義男

紀伊國屋書店

資本論入門

下

宮本 義男

紀伊國屋書店

目次

第三巻　資本の総生産過程

序　説　第三巻の理論的位置づけ……一四

第一篇　剰余価値の利潤への転形と剰余価値率の利潤率への転形

第一章　費用価格と利潤、利潤率……一八

(一)　問題提起

(二)　費用価格と利潤、利潤率

第二章　利潤率の剰余価値率にたいする関係……二五

(一)　問題提起

(二)　利潤率の剰余価値率にたいする関係

Ⅰ　m′は不変で$\frac{v}{C}$が可変な場合
Ⅱ　m′が可変な場合
第三章　不変資本使用上の節約および原料価格の変動……三〇
(一)　問題提起
(二)　不変資本使用上の節約および原料価格の変動
第二篇　利潤の平均利潤への転形
第四章　一般利潤率（平均利潤率）の形成と商品価値の生産価格への転形……三六
(一)　問題提起
(二)　一般利潤率の形成
(三)　商品価値の生産価格への転形
第五章　競争による一般利潤率の均等化—市場価値と市場価格・超過利潤—…四七
(一)　問題提起
(二)　市場価値と市場価格
(i)　商品価値の一般的規定についての反省

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(ii) 市場価値と市場価格の規定
(iii) 需給の変動と一致の意義
(iv) 市場価値の生産価格への転化

第三篇　利潤率の傾向的低下の法則

第六章　法則そのもの……六二
(一) 問題提起
(二) 利潤率の傾向的低下

第七章　反対に働く諸原因……七〇
(一) 問題提起
(二) 反対に働く諸原因
(i) 労働搾取度の増大
(ii) 労働力の価値以下への賃金の切下げ
(iii) 不変資本諸要素の低廉化
(iv) 相対的過剰人口
(v) 外国貿易
(vi) 株式資本の増加

第八章　法則の内的諸矛盾の展開……六八
(一)　問題提起
(二)　生産拡大と価値増殖との間の衝突
(三)　人口過剰のもとでの資本過剰
(四)　補　足

第四篇　商品資本と貨幣資本の商品取引資本と貨幣取引資本への転形

第九章　研究対象……九四
第十章　商品取引資本……九七
第十一章　商業利潤……一〇三
(一)　問題提起
(二)　商業利潤と商品取引資本の自立化にともなう生産価格
(i)　商品取引資本の展開
(ii)　商業利潤の根拠と流通費
(iii)　商品の販売価格

(三) 商人資本の回転と商業利潤
(四) 補　足
第十二章　貨幣取引資本……一八
第十三章　商人（商業）資本にかんする歴史的考察……一三
(一) 問題提起
(二) 前期的商人資本から産業資本への移行

第五篇　利子と企業者利得への利潤の分裂。利子付資本

第十四章　利子付資本……一三〇
(一) 問題提起
(二) 利子付資本
(三) 利子の本質
(四) 利子率
第十五章　利子と企業者利得……一四四
(一) 問題提起
(二) 利子および企業者利得範疇の確立の根拠

(三) 企業者利得
第十六章 利子付資本の形態における資本関係の外面化……一五一
第十七章 信用と擬制（架空）資本……一五四
(一) 問題提起
(二) 商業信用と銀行信用
(i) 商業信用
(ii) 銀行信用と擬制資本
第十八章 資本主義的生産における信用の役割……一六六
(一) 問題提起
(二) 資本主義的生産における信用の役割
(i) これまでの要約
(ii) 株式会社の形成
(三) 総括
第十九章 銀行資本の諸構成部分……一七五
(一) 問題提起

(二) 銀行資本の諸構成部分とその運動

第二十章　貨幣資本と現実資本……一八三

(一) 問題提起

(二) 貨幣資本と現実資本

(三) 貨幣資本と現実資本の背離と統一

第二十一章　信用制度下の流通手段および貴金属と為替相場……一九一

(一) 問題提起

(二) 信用制度下における流通手段

(i) 手形と銀行券の流通

(ii) 信用制度下における貴金属の運動

(iii) 金準備と為替相場

第二十二章　資本主義以前——高利貸資本の歴史的考察——……二〇七

(一) 問題提起

(二) 高利貸資本の歴史的考察

第六篇　超過利潤の地代への転形

第二十三章　差額地代。概説……二三四
(一)「資本一般」のもとにおける土地所有
(二)差額地代の一般的概念
第二十四章　差額地代の第一形態（差額地代Ⅰ）……二三四
(一)問題提起
(二)差額地代の第一形態
(三)「不当な社会的価値」または「虚偽の社会的価値」
第二十五章　差額地代の第二形態（差額地代Ⅱ）……二三九
第二十六章　差額地代は最劣等の耕作地にも生じる……二四九
第二十七章　絶対地代……二五五
(一)問題提起
(二)絶対地代
第二十八章　建築地地代。独占地代。土地価格……二六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二十九章　資本主義的地代の由来……二六八
(一)　問題提起
(二)　資本主義的地代の生成史

第七篇　諸所得とその源泉――『資本論』全巻の総括――

第三十章　第七篇の構成……二七八
第三十一章　始元としての商品への回帰……二八三
あとがき……二八八

第三巻　資本の総生産過程

序説　第三巻の理論的位置づけ

『資本論』第一巻では、まず第一篇において「商品および貨幣」が考察された。第一巻の主題は「資本の直接的生産過程」の分析にあるのだが、「商品および貨幣」の考察は、この分析のための、いわば序論的部分を形成するものであった。「商品および貨幣」の篇で検討された主要な課題は、価値の実体、価値の形態としての商品と貨幣、これら二つの価値形態の運動形式等々であった。ここでは価値が価値の実体と価値形態の運動形式という、内と外との両面から検討された。一方における価値実体の形成、他方における価値形態の運動形式の考察は、のちに展開さるべき、価値形成または価値増殖過程としての資本の生産過程と、資本価値の形式的な姿態変換の過程としての資本の流通過程との対立と相互補完を、抽象的に表現するものにほかならなかった。この意味では「商品および貨幣」の篇は、たんに第一巻のみならず『資本論』全巻の序論に該当するといっても過言ではない。

ともあれ、「資本の生産過程」の篇では、資本が流通過程を正常に経過するという前提のもとで、すなわち、「資本の生産過程」を資本の直接的生産過程として分析が行なわれた。ここでは価値の実体と増殖の過程およびその再生産の過程（資本の蓄積過程）が克明に分析された。

これに対して、資本の流通過程では、資本価値が資本の流通過程と生産過程をあい次いで経過する（資本循環）さいにとる資本の形式的姿態変換が考察され、ついで、資本循環の反復としての資本回転が、資本価値の運動にいかなる影響を及ぼすかが検討された。

ところで「資本の直接的生産過程」においても、資本の循環または資本の回転のさいにも、考察されたのは個別資本の運動であった。したがって『資本論』第二巻第三篇では個別資本の社会的な絡みあい、すなわち「社会的総資本の再生産と流通」が研究された。第二巻の第一篇および第二篇においては流通過程が個別資本の再生産過程を媒介するものとして分析されたとすれば、第三篇では、流通過程が社会的再生産過程の媒介者として究明されたといってよい。

このように、「資本の直接的生産過程」が価値の実体の形成または増殖に対応するものであり、「資本の流通過程」が価値形態の運動形式に対応するものだということは疑いない。

だが、現実においては、価値は価値形態を媒介にして形成され、増殖され、運動するように、つまり価値の実体と形態とは不可分離であるように、「資本の直接的生産過程」において資本価値がとる姿態と、「資本の流通過程」においてとる姿態とは不可分離であって、それぞれの過程は単独では具体的現実的な資本姿態の一面を表わすにすぎない。したがって「全体として考察された資本の運動過程」すなわち「資本の総生産過程」においては、これらの一面的に考察された資本姿態は、具体的な資本の運動形態の特殊契機として現象することになろう。

右にのべたように、第一巻および第二巻では、価値および剰余価値の法則が、その形成および増殖

の過程の側面からと、形式的姿態変換の過程の側面からと、それぞれ別々に考察された。第三巻の課題はこれらを統一的に把握することにある。マルクスの表現を借りると「全体として考察された資本の運動形態から生じる具体的諸形態を発見し叙述する」ことであり、競争の現実運動においてとる資本の形態に一歩一歩近づくことにある。

ところで、競争の現実運動に一歩近づいた、資本の具体的運動とはどういうことであろうか。

われわれはさきに、「資本の直接的生産過程」においては C＋V＋M がいかにして形成され増殖され、いかにして再生産されるかを中心に考察が進められ、「資本の流通過程」においては、C＋V＋M の形式的な姿態変換の過程が個別的にかつ社会的に考察された、と指摘しておいた。そうだとすれば、資本の具体的運動形態をとり扱う「資本の総生産過程」においては、考察はこれらの理論的成果を媒介にしたうえで、すなわち、資本価値の形式的な姿態変換が、内容としての価値にどのような影響を与えるかという視点から、したがって C＋V＋M が、いかにより具体的形態へ転化するか、という点からまず進められるべきであろう。『資本論』第三巻の第一篇が「剰余価値の利潤への転形と、剰余価値率の利潤率への転形」から始まり、第一篇第一章が「費用価格と利潤」となっているのは、こうした根拠にもとづくものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com